

東日本大震災に見る現代日本仏教者の

取り組み

研究生 菊池 結

平成二三年三月一日の東日本大震災発生直後から、各宗派は速やかに活動を開始した。各寺院と檀家の被害状況の視察をはじめとして、救援物資の送付、炊き出し、全国寺院を利用しての募金の呼びかけを行っている。それらの多くは報道されることなく、社会的に知られることはなかった。しかし、各宗派のホームページ、仏教系新聞には多くの活動が記載されている。彼らは、なぜいち早く被災地に行き、活動したのか。なぜ、一市民としてではなく、僧侶として仏教者として活動したのか。そこには、宗教者は良いことをするものだという自負もあるだろうし、人としてこの未曾有の震災を見て見ぬふりはできないという思いもあるだろう。

また、社会の側からも、社会問題が起こるたびに伝統仏教教団からのレスポンスが繰り返し期待される。震災後には人と人との「絆」が強調されたが、震災以前には「無縁社会」として高齢者の孤独死が問題とされ、仏教学や宗教学の分野で多くのシンポジウムが開かれたのを思い出ししてほしい。

本発表では、まず東日本大震災救援に関する記事を新聞三紙から検索し、今回の震災にあたって行われた仏教者の活動^{〔一〕}を述べた。東日本大震災発生の翌日から被災した地域

には県内外から多くのボランティアが駆け付け、各地域でがれきの撤去やごみの回収、炊き出しなどを行った。

また、各宗派では災害対策本部を設置。救援物資の受け付けや義援金を募るための口座の設置、本山職員のボランティアを派遣した。その内容は、①現状視察・支援物資②救援金・募金活動(托鉢)③慰霊・祈願の三通りに集約される。

また、心のケア活動としての天台宗の無償提供のカフェ、二〇〇七年の能登半島沖地震より始めた高野山足湯隊、曹洞宗の「喫茶去」傾聴ボランティアなどが仏教的な現代的解釈により行われているが、これらの活動は直接的な仏教用語では説明されない。さらに、阪神淡路大震災の際に、山折哲雄が「宗教はボランティアに負けたのか」の論議を提示したように、表面的には他のボランティア団体の活動と変わらず、仏教教団としての独自性をもつことは難しいことが指摘できる。

被災地での宗教的行為が受け入れられ難い一方で、災害救援などの社会問題に対する仏教者への期待は大きい。弓山達也は、東日本大震災を分析し、震災後の宗教への期待として、(一)顕著な個人の活動、(二)横の連携を支援するSNS、SNS、(三)繰り返す宗教(者)への過度の期待があることを指摘するが、震災支援に対して、「宗教だからできること」への過度の期待がある一方で、根強い宗教への警戒があることを述べているのである。

〔一〕「中外日報」・「仏教タイムス」・「文化時報」